

薬物乱用・依存の世帯調査

分担研究者 福井 進 国立精神・神経センター精神保健研究所
薬物依存研究部部長
研究協力者 和田 清 同研究部室長
伊豫 雅臣 同研究部室長
浦田重治郎 国立精神・神経センター国府台病院
精神科医長

研究要旨 無作為に抽出した東京圏、大阪圏の住民3,000人を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存に関する疫学調査」を施行した。有効回答者数(率)は2,125人(70.8%)であった。2,125人の日常生活のあり方、喫煙・飲酒の状況、睡眠薬など合法的な依存性薬物の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、薬物乱用に関する意識調査、周囲で違法薬物を乱用している人の周知度、違法薬物の乱用に誘われた経験の有無、違法薬物の乱用経験の有無などが明らかになった。これまでの薬物依存の疫学的指標は警視庁など取締機関や矯正施設の資料であり、疫学研究は精神科医療施設を対象としたものが主であった。住民を対象とした本格的、広域的な薬物乱用・依存の疫学調査研究はわが国では初めての研究である。

A. 研究目的

国際的に薬物乱用・依存問題は深刻な社会問題に発展している。

わが国では薬物乱用・依存が社会問題になったのは戦後のヒロポン乱用に始まりその歴史は浅い。戦後の社会を揺るがした覚せい剤乱用が衰退した昭和32年頃からヘロインが社会で乱用され社会問題となった。またその頃より睡眠薬、抗不安薬、鎮痛薬乱用が始まった。それらの薬物乱用が衰退した昭和42年より有機溶剤が、昭和45年より覚せい剤が乱用され、20年以上にわたり今日まで主な乱用薬物として社会に大きな影響を与えている。最近海外の影響を受けてコカイン、大麻乱用の流行の兆候がみられ、また医療で広く使用されているベンゾジアゼピン系薬物の依存が問題となりつつある¹。

こうして薬物乱用の歴史を振り返ると、一つの薬物乱用が消失すると、人は別の新しい乱用薬物を見つけ薬物乱用の流れはとどまることをしらない。薬物乱用は社会の近代化、及び急激な変化に伴って出現する社会病理の一つであると考えられる。

薬物乱用・依存は個人の健康にとどまらず、広く社会秩序、公衆衛生を含めた社会全体の問題である。

わが国の薬物乱用・依存の傾向及び実態を明らかにするために中学校、医療施設を中心にわれわれは疫学調査を実施してきたが、更に明らかにするためには一般市民を対象とした疫学調査研究が必要であり、薬物依存の予防・治療・教育対策を考える上で重要な資料となる。

特に、米国では3万人を対象に国家規模の予算でhousehold surveyが毎年実施されており、薬物乱用・依存の実態の把握と対策の大きな指標となっている。

わが国でも薬物乱用・依存の住民調査が望まれてきたが、われわれは平成4年度は市川市民1,100人を対象に疫学調査を実施した²。これはわが国初めての本格的な薬物乱用・依存の世帯調査であった。詳細は平成4年度「薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究」報告書にて報告した。わが国での実施が危ぶまれていたこの調査が、十分可能であると知った。

前年度の調査結果を参考にして、本年度は東京圏、大阪圏の住民各1,500人、計3,000人を対象に、薬物乱用・依存の意識、医療用薬物の使用状況、不法薬物の乱用の実態等を明らかにするとともに、この研究結果を次年度の本格的な全国調査の資料としたい。

B. 研究方法

企画は分担研究者の福井が担当し、調査の実施は社団法人「新情報センター」に委託した。

- ・地域 東京圏（旧都庁を中心に50km）、大阪圏（大阪駅を中心に40km）
- ・対象 各圏の満15歳以上の男女・標本数各圏1,500人、計3,000人
- ・抽出方法 層化2段無作為抽出法（地点数=200）
- ・調査方法 調査員による個別訪問留置法
- ・調査内容 前年度の調査結果を参考にして別表（末尾）の68からなる質問内容を設定した。
- ・調査期間 平成5年11月4日～12月3日
- ・調査機関 社団法人新情報センター

なお、資料の集計は新情報センターが行ない、解析は福井が行なった。

C. 結果

1. 回収結果

有効回収数（率）は2,125（70.8%）であった。この種の住民調査では予想を上回る回答率であると考えられる。

事故数（率）は875（29.2%）であった。その内訳は下表の通りであった。

表1 事故数（率）

転居	64（2.1%）
長期不在	33（1.1%）
一時不在	272（9.1%）
住居不明	26（0.9%）
拒否	431（14.4%）
その他	49（1.6%）

なお、調査期間中に調査対象住民より15件の電話による問い合わせがあったが、いずれも調査会社の性質を確認する問い合わせの質問であり、調査は特に問題なく順調に実施されたといえる。

2. 調査結果

（1）回答者の性、年齢、学歴、職業別分類（表2、3）

総対象2,125人中、東京圏1,072人、大阪圏1,053人であったが、地域差は次の機会に報告することにして今回は全体の結果を報告する。性別は、男性975人（45.9%）、女性1,150（54.1%）であり、女性の方が多かった。年齢、学歴、職業は以下に示す通りである。学歴は、大学卒31.2%（男性36.7%、女性26.4%）、高校卒51.5%（男性45.2%、女性56.9%）であり、高校卒以上の学歴を有する人は82.7%で、高学歴化社会を示す結果であった。なお、小学校卒（尋常小学校を含む）は60歳以上の人に多く、大学卒は20歳代55.3%、30歳代48.1%と高率に認められた。

表2 対象の性、年齢、学歴

	総数（%）	男性（%）	女性（%）
	2125(100.0)	975(100.0)	1150(100.0)
年齢			
15～19歳	180(8.5)	94(9.6)	86(7.5)
20～29歳	349(16.4)	152(15.6)	197(17.1)
30～39歳	368(17.3)	158(16.2)	210(18.3)
40～49歳	455(21.4)	199(20.4)	256(22.3)
50～59歳	380(17.8)	175(17.9)	205(17.8)
60歳以上	393(18.5)	197(20.2)	196(17.0)
学歴			
小学卒	57(2.7)	19(1.9)	38(3.3)
中学卒	286(13.6)	148(15.2)	141(12.3)
高校卒	1095(51.5)	441(45.2)	654(56.9)
大学卒	662(31.2)	358(36.7)	304(26.4)
無回答	225(1.0)	9(0.9)	13(1.1)

表3 職業別分類

	総数	男性	女性
	2125	45.9	54.1
就業形態			
自営（計）	287	57.1	42.9
自営業主	207	73.4	26.6
家族従業者	80	15.0	85.0
勤め人（計）	979	60.2	39.8
勤め人（民間会社）	658	74.3	25.7
勤め人（公務員）	86	73.3	26.7
勤め人（パート等）	235	15.7	84.3
学生（計）	221	54.3	45.7
中学生	12	58.3	41.7
高校生	125	52.8	47.2
予備校生	5	80.0	20.0
専門学校、各種学校	16	68.8	31.3
短大・大学生・大学院生	63	50.8	49.2
主婦専業	451	-	100.0
無職	183	54.1	45.9
*有職（計）	1266	59.5	40.5
*無職（計）	855	25.6	74.4
仕事内容			
自営業主、家族従業者（計）	287	57.1	42.9
農林魚業	20	75.0	25.0
商店主	93	53.8	46.2
工場主	51	70.6	29.4
土木建設業主	43	60.5	39.5
医療関係業主	1	-	100.0
サービス業	47	42.6	57.4
その他の事業主	32	53.1	46.9
勤め人	979	60.2	39.8
販売従事者	169	54.4	45.6
保安従事者	23	95.7	4.3
運輸従事者	34	97.1	2.9
通信従事者	7	57.1	42.9
サービス業従事者	68	27.9	72.1
技能職従事者	28	57.1	42.9
土木建設業	35	100.0	-
工場労働者	142	70.4	29.6
その他の労働従事者	29	48.3	51.7
事務従事者	275	48.4	51.6
管理的職業	66	97.0	3.0
医療職従事者	25	24.0	76.4
その他専門・技能職従事者	68	70.6	29.4
その他	10	30.0	70.0

(2) 日常生活に関する質問

1) 健康状態 (表4)

健康状態が「よくない」と回答した人は339人(16.0%)であり、男性14.1%、女性17.6%であった。男女とも年齢層が高くなるほど高率であった。

2) 日常生活、活動に意欲がなくなることがあるか (表5)

「意欲がなくなることがある」と回答した人は532人(25.0%)であった。

3) 毎日の仕事・学業がうまくいかないことがあるか (表6)

「仕事・学業がうまくいかない」と回答した人は692人(32.6%)で、男性35.3%、女性30.3%であった。

年齢層が低いほどその傾向を認めた。

4) 日常の生活で不安を感じ、緊張したことがあるか (表7)

「日常生活で不安感、緊張感を感じる」と回答した人は881人(41.5%)であった。

5) 頭痛、頭重感で悩まされることがあるか (表8)

「悩まされる」と回答した人は478人(22.5%)で、男性16.2%、女性27.8%と女性に多かった。年齢別特徴は特になかった。

6) 寝つけなかったり、早朝目覚めて眠れないことがあるか (表9)

「眠れないことがある」と回答した人は607人(28.6%)であり、男性28.6%、女性28.5%と男女差はなかった。年齢層が高くなるほど不眠者は高率であった。

7) 現在の生活に満足しているか (表10)

「満足している」と回答した人は1,776人(83.6%)であり、特に性別、年齢別による特徴はなかった。

表4 健康状態はいかがですか (%)

総対象数	良好である	概ね良好である	時々思わしくない	常時調子が悪い	無回答	良好 (小計)	よくない (小計)
2125人 (100.0)	646 (30.4)	1140 (53.6)	291 (13.7)	48 (2.3)	— —	1786 (84.0)	339 (16.0)

表5 日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか (%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある (小計)	ない (小計)
2125人 (100.0)	128 (6.0)	404 (19.0)	1227 (57.7)	365 (17.2)	1 (0.0)	532 (25.0)	1592 (74.9)

表6 毎日している仕事でうまくいかないことがありますか (%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある (小計)	ない (小計)
2125人 (100.0)	143 (6.7)	549 (25.8)	1208 (56.8)	217 (10.2)	8 (0.4)	692 (32.6)	1425 (67.1)

表7 日常の生活で不安を感じた、緊張したことがありますか (%)

総対象数	たびたび ある	あ る	あまりな い	まったく ない	無回答	あ る (小計)	な い (小計)
2125人 (100.0)	126 (5.9)	755 (35.5)	1007 (47.4)	236 (11.1)	1 (0.0)	881 (41.5)	1243 (58.5)

表8 頭痛や頭が重い感じで悩まされることがありますか (%)

総対象数	たびたび ある	あ る	あまりな い	まったく ない	無回答	あ る (小計)	な い (小計)
2125人 (100.0)	112 (5.3)	366 (17.2)	1020 (48.0)	625 (29.4)	2 (0.1)	478 (22.5)	1645 (77.4)

表9 寝つけなったり、朝早く目ざめて眠れないことがありますか (%)

総対象数	たびたび ある	あ る	あまりな い	まったく ない	無回答	あ る (小計)	な い (小計)
2125人 (100.0)	145 (6.8)	462 (21.7)	970 (45.6)	546 (25.7)	2 (0.1)	607 (28.6)	1516 (71.3)

表10 現在の生活に満足していますか (%)

総対象数	満足して いる	まあ満足 している	少し不満 である	全く不満 である	無回答	満 足 (小計)	不 満 (小計)
2125人 (100.0)	387 (18.2)	1389 (65.4)	307 (14.4)	38 (1.8)	4 (0.2)	1776 (83.6)	345 (16.2)

(3) 嗜好品に関する質問

1) 喫煙 (表11)

喫煙率は、31.0% (男性51.1%、女性14.0%)であった。

男性の喫煙率は30歳代62.7%が最も高く、20歳代59.9%、40歳代57.8%、50歳代52.0%、60歳以上46.7%、20歳未満10.6%であった。女性は30歳代20.5%、20歳代19.8%と高率であった。

10本以内/日8.3%、11~20本/日14.7%、21本以上/日8.0%であった。21本以上/日の喫煙者は男性では30歳代から50歳代に、女性

は30歳代、40歳代に比較的高率であった。

禁煙者の男性は50歳代以上に多く、女性は30歳代に多かった。

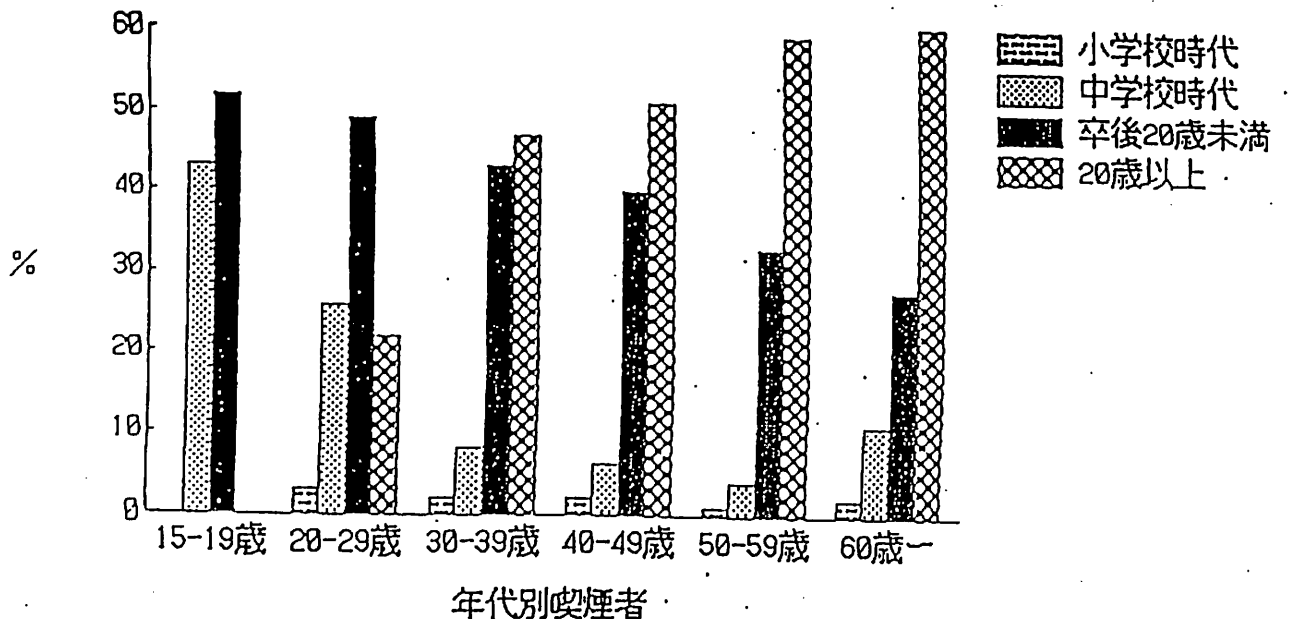
喫煙者985名中、初めて喫煙をした時期 (図1) は、小学校時代1.7%、中学校時代11.2%、中卒後20歳未満38.8%、20歳以後47.4%であり、過半数以上が未成年の時期に喫煙を始めている。男女とも未成年の喫煙者は42.9%が中学時代であった。また喫煙開始が「20歳を過ぎてから」が過半数を越えているのは、男性は50歳以上、女性は30歳以上の年齢層であった。最近の喫煙開始の低年齢化を示す結果

である。

表11 喫煙率

	人数	1日1~10本	1日11~20本	1日21本以上	パイプたばこ	以前吸っていたが現在吸っていない	吸ったことがない	加回答	吸っている(小計)	吸っていない(小計)
喫煙者【総数】	2125	8.3	14.7	8.0	0.0	15.3	53.3	0.3	31.0	68.7
問37: 性別										
男性	975	10.2	24.9	15.9	0.1	22.7	26.1	0.2	51.1	48.7
女性	1150	6.8	6.0	1.2	-	9.1	76.4	0.4	14.0	85.6
問38: 年齢										
15~19歳	180	4.4	2.8	-	-	4.4	88.3	-	7.2	92.8
20~29歳	349	12.0	18.1	7.2	-	9.2	53.3	0.3	37.2	62.5
30~39歳	368	10.1	17.9	10.6	-	18.5	42.7	0.3	38.6	61.1
40~49歳	455	6.2	16.5	10.5	0.2	14.1	52.3	0.2	33.4	66.4
50~59歳	380	4.7	13.4	10.3	-	18.9	51.8	0.8	28.4	70.8
60歳以上	393	11.2	13.2	4.6	-	20.9	49.9	0.3	29.0	70.7
性別×年齢										
男性×15~19歳	94	6.4	4.3	-	-	4.3	85.1	-	10.6	89.4
男性×20~29歳	152	15.1	30.3	14.5	-	7.9	31.6	0.7	59.9	39.5
男性×30~39歳	158	10.1	31.0	21.5	-	19.0	18.4	-	62.7	37.3
男性×40~49歳	199	7.5	28.1	21.6	0.5	24.6	17.6	-	57.8	42.2
男性×50~59歳	175	5.1	25.1	21.7	-	32.6	15.4	-	52.0	48.0
男性×60歳以上	197	15.2	22.3	9.1	-	35.0	17.8	0.5	46.7	52.8
女性×15~19歳	86	2.3	1.2	-	-	4.7	91.9	-	3.5	96.5
女性×20~29歳	197	9.6	8.6	1.5	-	10.2	70.1	-	19.8	80.2
女性×30~39歳	210	10.0	8.1	2.4	-	18.1	61.0	0.5	20.5	79.0
女性×40~49歳	256	5.1	7.4	2.0	-	5.9	79.3	0.4	14.5	85.2
女性×50~59歳	205	4.4	3.4	0.5	-	7.3	82.9	1.5	8.3	90.2
女性×60歳以上	196	7.1	4.1	-	-	6.6	82.1	-	11.2	88.8

図1 年代別喫煙者の喫煙開始時期



2) 飲酒 (表12)

アルコールを飲むという人の率は71.9% (男性83.9%、女性61.7%)であった。

「殆ど毎日飲む人」は21.8% (男性38.4%、女性7.7%)であり、年齢別では男性50歳代57.1%、40歳代48.2%、60歳代47.2%と高率であり、女性は30歳代12.4%、40歳代9.0%の順であった。

男性は「週に2~3回」以上の習慣飲酒者が多く、女性は「月に1~2回」以下の機会的飲酒者が多い。

「全く飲まない人」は26.7% (男性15.0%、女性36.6%)であった。

アルコールを摂取している人1,555人中、初めてアルコールを飲んだ時期は、「小学校時代」7.5%、「中学校時代」7.7%、「中卒後20歳未満」37.4%、「20歳過ぎてから」47.1%であり、過半数以上が未成年の間に経験をしていた。

60歳以上の男性飲酒者と30歳以上の女性飲酒者の50%以上が成人になって初めて飲酒を経験したと回答していた。

表12 飲酒率 (%)

総対象数	全く飲まない	年に10回以内飲む	月に1~2回飲む	週に1回飲む	週に2~3回飲む	週に4回飲む
2125人 (100.0)	567 (26.7)	335 (15.8)	264 (12.4)	159 (7.5)	215 (10.1)	92 (4.3)

ほとんど毎日飲む	現在禁酒中	無回答	飲む (小計)	飲まない (小計)
463 (21.8)	27 (1.3)	3 (0.1)	1528 (71.9)	594 (28.0)

3) 喫煙と飲酒の関係

喫煙と飲酒は密接な関係が認められ、喫煙者は非喫煙者より飲酒率は高く、また喫煙本数が増えると飲酒率も高くなる傾向を認めた。特に「毎日の飲酒者」にその傾向が強かった。

喫煙者の飲酒開始時期が20歳以後が38.3%に対し、非喫煙者は56.9%であり、喫煙が早期の飲酒開始時期と密接な関係があった。

(4) 医療用薬物の使用に関する質問

1) 家庭に用意してある常備薬の種類 (複数回答) (表13)

「常備薬を特に用意していない」と答えた人は8.3%にすぎず、何等かの常備薬を家庭に用意している人がほとんどであった。風邪薬80.4%、胃腸薬78.1%、湿布薬62.1%、鎮痛薬46.6%、ビタミン剤41.6%が多い常備薬で

あった。

2) 常用している薬の種類 (複数回答) (表14)

「常用薬は特にない」と答えた人は64.5%であり、「何等かの常用薬を使用している」と回答した人は33.1%であって、年齢が高いほど高率で50歳代42.6%、60歳以上55.0%であった。

常用薬は、ビタミン剤13.7%、胃腸薬12.1%、血圧の薬6.4%、風邪薬3.5%が比較的多く、鎮痛薬2.6%、精神安定薬1.3%、睡眠薬1.0%、強精強肝剤1.0%などであった。

胃腸薬、強精強肝剤は男性に多く、鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬は女性に多い傾向を認めた。

表13 家庭に用意してある薬（複数回答）（%）

総対象数	特に用意なし	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝剤	鎮痛剤	精神安定薬
2125人 (100.0)	177 (8.3)	1708 (80.4)	1659 (78.1)	883 (41.6)	66 (3.1)	990 (46.6)	90 (4.2)

睡眠薬	抗生物質	湿布薬	その他	無回答	回答計	用意あり (小計)
72 (3.4)	167 (7.9)	1319 (62.1)	150 (7.1)	6 (0.3)	7287 (342.9)	1942 (91.4)

表14 常用している薬（複数回答）（%）

総対象数	特になし	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝剤	鎮痛剤	精神安定薬
2125人 (100.0)	1370 (64.5)	75 (3.5)	258 (12.1)	291 (13.7)	21 (1.0)	56 (2.6)	28 (1.3)

睡眠薬	抗生物質	血圧の薬	その他	無回答	回答計	常用薬あり (小計)
21 (1.0)	15 (0.7)	135 (6.4)	139 (6.5)	51 (2.4)	2460 (115.8)	704 (33.1)

3) 最近1年間に鎮痛薬を使用した人（表15）

「最近1年間に鎮痛薬を使用した人」は283名(13.3%)で男性11.8%、女性14.6%であった。

年齢別では60歳以上に高率(20.1%)であり、特に女性にその傾向が強かった。

週に数回以上の使用者(常用者)は2.6%に認めた。

入手先は病院47.3%、薬局20.5%、常備薬29.7%であった。

283名中、「続けて飲みたい」と精神依存を形成している人は1.1%であり、いずれも50歳以上の人であった。

4) 最近1年間に精神安定薬を使用した人（表15）

「最近1年間に精神安定薬を使用した人」は98名(4.6%)であり、男性2.5%、女性6.4%と女性が2.5倍も多かった。

「週に数回以上の使用者」は1.9%であり、常用者と考える。

男性は60歳以上は6.6%、女性は50歳以上の9.3~13.8%と使用率が高い。

精神安定薬の入手先は病院93.9%、薬局2.0%と殆どが医療機関であった。

精神安定薬を使用していた人は、日常生活において「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と答えた人に有意(p<0.0001)に高率であった。

精神安定薬の使用者98名の使用理由は、不眠、不安、ストレス、高血圧など精神的・身

表15 最近1年間に使用した医療用の向精神薬

薬物名	年に数回 使用	月に数回 使用	週に数回 使用	日に1-3 回使用	日に数回 以上使用	使用者 小計
鎮痛薬	181 (8.5)	47 (2.2)	20 (0.9)	29 (1.4)	6 (0.3)	283 (13.3)
精神安定薬	39 (1.8)	18 (0.8)	13 (0.6)	25 (1.2)	3 (0.1)	98 (4.6)
睡眠薬	48 (2.3)	22 (1.0)	7 (0.3)	16※ (0.8)	1 (0.04)	94 (4.4)

※日に1回

体的疾患の改善であり、ほとんどが治療目的による使用であった。遊びの目的でと答えた人が1名いた。

「続けて使用したい」と精神依存を形成していた人は4人認めた。

5)最近1年間で睡眠薬を使用した人(表15)

「最近1年間で睡眠薬を使用した人」は94名(4.4%)で、「週に数回以上の使用者(常用者)」は1.1%であった。

睡眠薬の使用者は男性2.7%、女性5.9%と女性が男性の2倍であり女性の使用率は高かった($p < 0.0001$)。

男性は60歳以上の6.1%、女性は50歳以上の9.8~11.2%が使用者であり、高い使用率を示していた。

睡眠薬の使用者は日常生活において「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」と答えた人に有意に高率を認めた。

使用者94名の睡眠薬の入手先は、病院88.3%、薬局4.3%、常備薬4.3%であった。

使用理由(複数回答)は「不眠の治療」84.0%であり、不安、ストレスなどの精神的苦痛、高血圧その他身体疾患など治療の目的であった。

「続けて使用したい」と精神依存を形成している人は3.2%で、すべて50歳以上の人であった。

(5)薬物乱用に関する意識調査

1)薬物乱用という言葉を知っているか(表16)

知っていると答えた人870名(40.9%)であった。

2)知っている乱用薬物の名前(複数回答)(表17)

大麻、麻薬、コカイン、覚せい剤、シンナーは90%前後の人が知っているとは回答した。モルヒネ、ヘロインは80%前後、ヒロポンは62.3%が知っていた。トルエン48.1%、LSD 32.6%、クラック20.5%そして有機溶剤は15.1%の人のみが知っていたと回答した。

3)乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っているか(表18)

乱用薬物は依存を形成することを、1,945人(91.5%)が「よく知っている」「だいたいわかる」と回答した。

4)日本における薬物乱用の問題状況(表19)

「一般の人々に広がり危険な状況」「一般の人々に多少広がり始めている」と72.7%の人がわが国の薬物乱用状況を危険視していた。

5)「あへん戦争」について知っているか(表20)

あへん戦争について「内容をくわしく知っている」は7.2%、「内容を多少知っている」は34.4%と883名(41.6%)が知っている、半数以上が「知らない」と回答した。

6)米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っているか(表21)

米国・中南米の麻薬戦争を529名(24.9%)ののみが知っているとは回答した。

7)覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題だと思うか(表22)

「覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題である」と1,883名(88.6%)の人が認める回答をした。

表16 薬物乱用という言葉を知っていますか (%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
2125人 (100.0)	113 (5.3)	757 (35.6)	1138 (53.6)	110 (5.2)	7 (0.3)	870 (40.9)

表17 知っている乱用薬物の名前(複数回答) (%)

総対象数	大麻	モルヒネ	ヘロイン	麻薬	コカイン	L. S. D	ヒロポン
2125人 (100.0)	1964 (92.4)	1687 (79.4)	1803 (84.8)	1928 (90.7)	1906 (89.7)	693 (32.6)	1324 (62.3)

覚せい剤	トルエン	シンナー	有機溶剤	クラック	どれも知らない	無回答
1924 (90.5)	1023 (48.1)	1985 (93.4)	321 (15.1)	435 (20.5)	27 (1.3)	2 (0.1)

表18 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか (%)

総対象数	よく知っている	だいたいわかる	知らない	無回答	知っている(計)
2125人 (100.0)	914 (43.0)	1031 (48.5)	177 (8.3)	3 (0.1)	1945 (91.5)

表19 日本における薬物乱用の問題状況 (%)

総対象数	一般人に危険状態	広がり始めている	まだ初期の段階	問題は全くない	わからない	無回答
2125人 (100.0)	568 (26.7)	978 (46.0)	155 (7.3)	14 (0.7)	402 (18.9)	8 (0.4)

表20 「あへん戦争」について知っていますか (%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
2125人 (100.0)	152 (7.2)	731 (34.4)	991 (46.6)	244 (11.5)	7 (0.3)	883 (41.6)

表21 米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか (%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
2125人 (100.0)	59 (2.8)	470 (22.1)	996 (46.9)	596 (28.0)	4 (0.2)	529 (24.9)

表22 覚せい剤乱用問題は一般の人々に関係のある問題とご思いますか (%)

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う(小計)	思わない(小計)
2125人 (100.0)	831 (39.1)	1052 (49.5)	197 (9.3)	38 (1.8)	7 (0.3)	1883 (88.6)	235 (11.1)

表23 「自分に薬物乱用の手が伸びてくる事がある」とご思いますか (%)

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う(小計)	思わない(小計)
2125人 (100.0)	45 (2.1)	236 (11.1)	853 (40.1)	990 (46.6)	1 (0.0)	281 (13.2)	1843 (86.7)

表24 薬物によってはさほど危険ではない薬物もあると思ごいますか (%)

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う(小計)	思わない(小計)
2125人 (100.0)	106 (5.0)	255 (12.0)	773 (36.4)	979 (46.1)	12 (0.6)	361 (17.0)	1752 (82.4)

8) 「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる事がある」と思ごうか (表23)

「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる事がある」と考えている人は281名 (13.2%) のみで、薬物乱用は自分とはあまり関係がない問題と捉えている人が多かつた。

9) 薬物によってはさほど危険ではない薬物もあると思ごうか (表24)

薬物によってはさほど危険でない薬物がある」と361名 (17.0%) が回答していた。

10) 「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行の周知度 (表25)

「シンナー遊び」が一部未成年者の間で流行していることを「知っている」と回答した人は2002名 (94.2%) でほとんどの人が認識していた。

11) 覚せい剤が長年にわたり乱用されていることの周知度 (表26)

「覚せい剤がわが国で乱用されている」ことを1,861名 (87.6%) の人が認識していた。

表25 「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行周知度 (%)

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
2125人 (100.0)	973 (45.8)	1029 (48.4)	123 (5.8)	- -	2002 (94.2)

表26 覚せい剤が長年にわたり乱用されていることの周知度 (%)

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
2125人 (100.0)	592 (27.9)	1269 (59.7)	259 (12.2)	5 (0.2)	1861 (87.6)

表27 家庭内で薬物乱用に関する話をしたことがありますか (%)

総対象数	ほとんどない	話したことがある	時々話す	無回答
2125人 (100.0)	1285 (60.5)	625 (29.4)	210 (9.9)	5 (0.2)

12) 家庭内で薬物乱用に関する話をしたことがあるか (表27)

この質問に対し、「ほとんどない」と回答した人は1,285名(60.5%)であって、家庭内で薬物乱用問題が話題として語られる家庭が少ないことを示していた。

薬物乱用問題に関する認識度の質問に対して、「シンナー遊び」、覚せい剤乱用がわが国の主要な薬物乱用問題であって、一般の人に広がりつつある危険な状況にあるが、自分とはあまり関係ない問題と考えている人が多かった。また歴史、外国の問題、概念などについての認識度は比較的低かった。女性は男性に比べて全般的に関心度は低かった。

(B) 海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

1) 海外旅行、出張、留学をしたことのある人(複数回答)

海外に行ったことのない人は1,290名(60.

7%)であり、その他の人832名(39.2%)は海外に行った経験を持っていると回答した。

旅行が757名(35.6%)と最も多く、海外出張89名(4.2%)、仕事で駐在18名(0.8%)、留学21名(1.0%)その他であった。

2) 海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしたか(表28)

該当者832名中、「薬物の使用の噂を聞いたことのある人」66名(7.9%)、「知っている」と答えた人41名(4.9%)であった。

3) 海外滞在中に、薬物使用を誘われたことがあるか(表29)

832名中、29名(3.5%)が誘われたことがあったと回答していた。

4) 海外滞在中に、使用した薬物は何か(表30)

832名中、9名(1.1%)が薬物を使用したと回答した。大麻が5名(0.6%)、その他4名(0.5%)であり、海外で大麻を経験する人が多いことを示唆している。大麻経験者は20歳代、30歳代の人であった。

表28 海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしたか (%)

該当数	知らない	噂を聞いた	知っている	無回答
832人 (100.0)	718 (86.3)	66 (7.9)	41 (4.9)	7 (0.8)

表29 海外滞在中に、薬物使用に誘われたことがあるか (%)

該当数	ない	ある	何とも言えない	無回答
832人 (100.0)	786 (94.5)	29 (3.5)	10 (1.2)	7 (0.8)

表30 海外滞在中に使用した薬は何か (%)

該当数	大麻	その他	無回答	使用した (小計)
832人 (100.0)	5 (0.6)	4 (0.5)	23 (2.8)	9 (1.1)

(7) 周囲で薬物乱用をしている人の周知度 (表31)

あなたの周囲で薬物を乱用している人を知っているか、そしてその薬物名はとの質問に対し、「知っている」と回答した人は9.6%

あり、その人が使用している薬物名(複数回答)は、覚せい剤40名(1.9%)、シンナー153名(7.2%)、大麻23名(1.1%)、コカイン6名(0.3%)、ヘロイン1名(0.04%)、薬物不明20名(0.9%)であった。

表31 周囲で薬物を乱用している人を知っているか (%)

該当数	知らない	知っている	何とも言えない	無回答
2125人 (100.0)	1826 (87.5)	204 (9.6)	59 (2.8)	2 (0.1)

表32 その人が使用している薬物はなにか (複数回答)

総対象数	覚せい剤	シンナー有機溶剤	大麻	コカイン	ヘロイン	薬物名不明	無回答
2125人 (100.0)	40 (1.9)	153 (7.2)	23 (1.1)	6 (0.3)	1 (0.04)	20 (0.9)	1 (0.04)

(8) 回答者自らが過去に薬物乱用に誘われた経験の有無 (表33)

1) シンナー等有機溶剤の使用を誘われたか

「シンナー等有機溶剤の使用を誘われた経験がある」と回答した人は45名 (2.1%) であった。

2) 有機溶剤を誘った人は誰か (複数回答)

(表33)

該当者45名中、「学校の友人・知人」28名 (62.2%)、「その他の友人・知人」15名 (33.3%)、「密売人」2名 (4.4%)、「見知らぬ人」4名 (8.9%) であり、有機溶剤乱用には、学校の友人・知人の影響が強いことを示唆している。

3) 覚せい剤の使用を誘われたことがあるか

(表33)

「覚せい剤の使用を誘われた経験」があると回答した人は14名 (0.7%) であった。

4) 覚せい剤を誘った人は誰か (複数回答)

(表33)

該当者14名中、「学校の友人」1名 (7.1%)、「その他の友人」9名 (64.3%)、「恋人」1名 (7.1%)、「密売人」2名 (14.3%)、「

見知らぬ人」1名 (7.1%) であり、多くは友人・知人から誘われており、仲間の影響が大きいことを示唆している。また見知らぬ人 (密売人、乱用者等) の影響も大きいことを示している。

5) 大麻の使用を誘われたことがあるか

(表33)

「大麻の使用を誘われた」経験があると答えた人は23名 (1.1%) であり、覚せい剤に比べて多く、回答者には大麻の方がダークなイメージがなく回答しやすかったと推察する。

また、23名中、海外の旅行、滞在経験のある人は21名であって、海外での生活の影響が大きいことを示唆している。いずれも高校卒、大学卒の高学歴者であった。

6) 大麻を誘った人は誰か (複数回答)

(表33)

該当者23名中、「学校の友人・知人」6名 (26.1%)、「その他の友人・知人」9名 (39.1%)、「恋人」1名 (4.3%)、「見知らぬ人」6名 (26.1%)、「その他」2名 (8.7%) であった。友人・知人の影響の大きいことを示している。

表33 薬物乱用に誘われた経験のある人と誘った人 (複数回答)

薬物名	経験有 %	学校の友人・知人	その他の友人知人	恋人	密売人	見知らぬ人	その他
シンナー等有機溶剤	45 2.1%	28 (62.2)	15 (33.3)	— —	2 (4.4)	4 (8.9)	— —
覚せい剤	14 0.7%	1 (7.1)	9 (64.3)	1 (7.1)	2 (14.3)	1 (7.1)	— —
大麻	23 1.1%	6 (26.1)	9 (39.1)	1 (4.3)	— —	6 (26.1)	2 (8.7)
コカイン	2 0.1%	— —	2 (100.0)	— —	— —	— —	— —
ヘロイン	4 0.2%	— —	3 (75.0)	— —	— —	1 (25.0)	— —

注：() 内%は薬物別経験者を100%とする
経験者の比率は総対象2,125人を100%とする

7) コカインの使用を誘われたことがあるか

(表33)

「コカインの使用を誘われた」経験があると回答した人は2名(0.1%)であった。誘った人は「その他の友人・知人」2名あった。8)ヘロインの使用を誘われたことがあるか

(表33)

あると回答した人は4名(0.2%)であった。いずれも海外滞在経験者であった。誘った人は「その他の友人・知人」3名(75.0%)、「見知らぬ人」1名(25.0%)であった。

表34 薬物乱用を過去、現在に経験した人(%)

薬物名	一度も経験なし	過去に数回経験あり	過去に何回も経験あり	最近1年に何回も経験あり	無回答	経験あり小計
シンナー等有機溶剤	2089 (98.3)	26 (1.2)	7 (0.3)	— —	3 (0.1)	33 (1.6)
覚せい剤	2115 (99.5)	6 (0.3)	2 (0.1)	— —	2 (0.1)	8 (0.4)
大麻	2115 (99.5)	8 (0.4)	— —	— —	2 (0.1)	8 (0.4)
コカイン	2123 (99.9)	1 (0.04)	— —	— —	1 (0.04)	1 (0.04)
ヘロイン	2122 (99.9)	— —	— —	— —	3 (0.1)	— —

(9) 過去・現在に違法薬物乱用の経験の有無

1) 「シンナー遊び」の経験の有無(表34)

「過去に経験した」と回答した人は23名(1.5%)であった。男性26名(2.7%)、女性7名(0.6%)であった。

2) 覚せい剤の使用の有無(表34)

「過去に数回経験した」と答えた人は8名(0.4%)であり、男性6名(0.6%)、女性2名(0.2%)であった。いずれも30歳以上の人であり、女性は30歳代であった。

3) 大麻の使用の有無(表34)

「過去に数回使用した」と答えた人は、8名(0.4%)であり、男性5名(0.6%)、女性3名(0.2%)であった。20歳代3名、30歳代4名であり、いずれも高校卒業以上の学歴を持つ人であった。海外滞在を経験した人6名であり、

海外での生活経験と関係が高いことを示唆している。

4) コカインの使用の有無(表34)

「過去に数回経験した」と回答した人は、1名(0.05%)でサービス業関係の30歳代の女性であった。

5) ヘロインの使用の有無(表34)

ヘロインの使用経験者はいなかった。

違法薬物の使用の動機となる人物は「身近な友人・知人」が多いことを示している。

また、回答者は不法薬物の現在の使用をいずれも否定していた。これは前年度に行った市川市民の調査でも同様であった。回答しにくい質問であり、この種の調査の難しさを示していた。今後、質問内容、調査方法をさらに検討する必要がある。

D. 考察

われわれは、平成4年度に千葉県市川市住民1,100人を対象に「薬物乱用・依存の世帯調査」を実施し、市民の協力を得て73.8%の高い回収率であった²。わが国でもこの種の調査研究が可能であることを知った。

平成4年度の世帯調査を参考にして、平成5年度は調査地域をさらに拡大して東京、大阪を中心とした調査を行った。東京圏は旧都庁を中心に50km圏、大阪圏は大阪駅を中心に40km圏の各住民（15歳以上の男女）1,500人、計3,000人を対象に調査は行われた。東京圏では横浜、八王子、大宮、千葉の各市が圏内に入る。大阪圏は京都、神戸市が圏内に入る。調査方法は個別訪問留置法を用いた。

有効回収率は70.8%であり、前年度の市川市の調査に比べやや低いが、この種の調査では高い回収率であると考ええる。

調査内容は、日常生活、たばこ等嗜好品、依存性を有する医療用薬物の使用状況、薬物乱用に関する意識、違法薬物の使用など多岐にわたっていた。

以下、調査結果について考察する。

1. 日常生活に関する質問について

「健康状態」の質問では、健康状態がよくなないと回答した人は16.0%認めたが、男性では50歳以上、女性は40歳以上からその比率は高くなってきた。男女とも中高年になると身体の不調を感じる人が増え、60歳以上の高齢者では男女とも1/4の人が身体的不調を感じていた。

「日常生活、活動に意欲がなくなることがある」と回答した人は25.0%であったが、特に性別、年齢別特徴はなかった。

「仕事、学業、家事がうまくいかない」と回答した人は32.6%であった。

男女とも10歳代の未成年者に高率（男性42.6%、女性52.3%）であり、年齢層が高くなるにつれて低率となり、60歳以上では男性28.4%、女性21.4%であった。若年層ではIdentityの確立がまだ不十分なところからこの結果になったものと考ええる。

「日常生活で不安感、緊張感をもつ」と回答した人は41.5%と高率であり、現在の複雑な社会構成を反映したものと考ええる。

「頭痛、頭重感で悩まされる」と回答した人は22.5%であったが、男性16.2%、女性27.8%と女性に高率に認めた。後述の鎮痛薬の使用率が女性の方が高率なことと関係のある結果である。特に年齢との関係はなかった。

「眠れないことがある」と回答した人は28.6%であり、男女差はなかった。しかし50歳以上になると33.4~42.2%、特に60歳以上では男性37.1%、女性47.4%と高率であった。

「入眠障害、早朝覚醒がたびたびある」という人は6.8%であったが、60歳以上では男性9.6%、女性14.8%が不眠で悩んでいる。当然、この人たちの睡眠薬常用率は高く、高年齢社会を迎えて一般健康問題を含めてその対策が必要であると考ええる。

「現在の生活に満足している」と回答した人は83.6%であり、性別、年齢にそれほどの差を認めなかった。

これらの日常生活の問題は、喫煙、飲酒とは特に関係はなかったが、鎮痛薬、抗不安薬、睡眠薬の服用とは有意な関係を認めた。

また、有機溶剤、覚せい剤など違法薬物使用とは特に関係は認めなかった。

2. 嗜好品に関する質問

喫煙率は、31.0%（男性51.1%、女性14.0%）であった。

男性の喫煙率は30歳代62.7%と最も高く、20歳代59.9%、40歳代57.8%、50歳代52.0%、60歳代46.7%、10歳代10.6%であった。女性は30歳代20.5%、20歳代19.8%と高率であった。

禁煙者は、男性は50歳代以上に多く、女性は30歳代に多かった。男性は健康の悪化が禁煙に踏み切った理由であり、女性は育児と関係があると推察する。

平成5年5月日本たばこ産業株式会社が実態調査を実施しているが、それによると喫煙率36.1%（男性59.8%、女性13.8%）であり、男性は20~40歳代、女性は20~30歳代が高率であったと報告している。

それに比べるとわれわれの喫煙率は低い（特に男性が低い）結果であった。日本たばこ産業は20歳以上を対象に調査を施行していたが、われわれは15歳以上で主に都会が中心であったことがその差に表われたものと考ええる。

男性では常習飲酒者が多く、女性は機会的飲酒者が多く、男性はほとんど「毎日飲酒する人」は40歳以上に高率に認めた。

喫煙と飲酒は密接な関係が認められ、喫煙者は非喫煙者より有意に飲酒率は高く、また喫煙本数が増えると飲酒率も高くなる傾向を認めた。特に「毎日の飲酒者」にその傾向が強かった。

喫煙者の飲酒開始時期が20歳以上が38.3%に対し、非喫煙者は56.9%であり、喫煙が早期の飲酒開始時期と密接な関係があった。

喫煙、飲酒の開始時期は最近低年齢化しているが、わが国では今後、未成年者のニコチン、アルコールを含め依存性物質に対する学校教育の問題は益々重要な課題として考えていかねばならない。

3. 鎮痛薬、抗不安薬、睡眠薬の使用について

ほとんどの家庭で何等かの常備薬を備えていた。胃腸薬、風邪薬、湿布薬、鎮痛薬、ビタミン剤などが主な薬剤であった。

日常生活で常用薬を服用している人は33.1%で、当然ながら年齢層が高いほど高率であった。

その中で依存性薬物は、鎮痛薬2.6%、抗不安薬1.3%、睡眠薬1.0%が常用されていた。男性より女性に多い傾向を認めた。

この比率は前年度の市川市の調査結果とほとんど変わりなかった。

最近1年間に鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用した人について詳細に調査した。

「この1年間に鎮痛薬を使用した人（以後使用者という）」は13.3%、週に数回以上の使用者（以後常用者という）は2.6%であった。

精神安定薬の使用者4.6%、常用者1.9%であった。「日に数回以上の使用者」は0.1%で乱用・依存例が疑われる。

睡眠薬の使用者4.4%、常用者1.1%であった。しかし「日に数回以上の使用者」は1名(0.04%)が乱用・依存例が疑われるが、この資料だけで同定することは出来ない。

いずれも女性の使用率は男性より高く、50歳以上の中老年者に多いことが特徴であった¹。鎮痛薬の使用理由は頭痛その他身体的疼痛の改善を目的としたものであった。

精神安定薬、睡眠薬の使用理由は不眠、不安、ストレス、高血圧など身体的疾患の改善など治療目的によるものであった。

精神安定薬、睡眠薬の使用者は、日常生活で「健康状態がよくない」「活動意欲の減退がある」「不安感、緊張感がある」という人と有意な関係を認めた。日常生活の中で健康状態、活動意欲、感情面で不安定な人、すなわち神経症的傾向の人に精神安定薬、睡眠薬の使用・常用者が多いことが推察される。

この人たちの中に薬物に対する精神依存を形成している人は各薬物に数名認めたが、特に乱用・依存例については疑わしい人は調査からは特定できなかった。

調査地域の東京圏、大阪圏の15歳以上の人口は36,568,092人であった。それから換算すると、この地域での鎮痛薬の使用者は486万人、常用者は95万人と推測する。精神安定薬の使用者は168万人、常用者は69万人に、睡眠薬の使用者は160万人、常用者は40万人になると推測される。非常に多くの人々が鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬を使用し、常用していることになる。

前述のように前年度の市川市の常用者の率と東京・大阪圏の結果は殆ど同じであった。著者らの全国の医療施設の調査から鎮痛薬、精神安定薬、睡眠薬の使用者は特に地域差を認めなかった³。これらの薬物の使用は流行と関係なく、個人の性格、健康など個人的理由と密接な関係があることから地域差はないといわれている。

したがって、この使用率、常用率を全国にあてはめることは可能と考える。

15歳以上の男女は全国で約1億100万人いることから、鎮痛薬を1年間に使用したことがある者は約1,343万人、常用者は262万人、精神安定薬の1年間の使用者464万人、常用者は192万人、睡眠薬を1年間に使用した人444万人、常用者111万人いると推察する。

非常に多くの人々が依存性を有する医療用薬物を使用しているといえる。

この中に乱用・依存例といわれる人がどれくらいいるかはまだ同定は出来ないが、潜在的な乱用・依存例はかなりいると推察する。

今後の研究課題である。

4. 薬物乱用に関する意識調査

わが国で覚せい剤と有機溶剤が長年にわたり乱用されていることについては、90%前後の人が認識しており、危険な状況にあると思っている。しかし、薬物乱用・依存問題は一般の人々とは関係があるが、自分とは直接関係がないと考えている人が多い。

中南米の麻薬戦争など外国での薬物乱用問題、あへん戦争のような歴史上の出来事については過半数以上の人々が認識していない。家庭内でも薬物乱用問題は語られることが少ないことが調査からわかった。

男性に比べて女性の認知度はやや劣り、男女とも未成年者、60歳以上の人に劣る傾向があった。

今後、薬物乱用・依存についての学校教育、啓発・啓蒙運動のあり方について再検討の必要があると考える。

5. 海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

近年、海外との交流が盛んになるにつれて海外旅行、出張、留学、駐在を経験する人が増加している。その一部の人に大麻、コカイン、ヘロインなどの違法薬物を経験する人がいると言われている。そこで海外旅行、滞在与薬物乱用の関係について質問を行った。

これまでに海外旅行、出張などで海外に滞在した経験者は832名(39.2%)いた。832名中、「海外滞在中に薬物を使用した人を見聞きしたか」の質問に「知っている」と回答した人41名(4.9%)いた。

また、「海外滞在中に、薬物の使用を誘われた人」は、29名(3.5%)であった。さらに、「自ら薬物を使用した」と回答した人は9名(1.1%)であり、大麻5名(0.6%)、その他4名(0.5%)であった。

法務省入国管理局の資料によると平成4年中に外国に行った15歳以上の人は、約1,135万人いたという。東京圏、大阪圏の調査結果を法務省の資料に用いることに統計上問題はあるが、一応換算を試みた。

それによると、「海外滞在中に薬物を使用した人を知っている」人は55万人、「薬物乱用を誘われた人」は約39万人、「自ら薬物を使用した人」は約12万人、その内「大麻を使用した人」は約7万人いることになる。

海外滞在中に薬物乱用に誘われたり、自ら使用する機会がいかにか多いかを示唆する結果である。

6. 周囲で薬物乱用をしている人の周知度

「あなたの周囲で薬物を乱用している人を知っているか、そしてその薬物名は」との質問に「知っている」と回答した人は204名(9.6%)いた。使用している薬物(複数回答)は有機溶剤が最も多く153名(7.2%)であり、次いで覚せい剤が40名(1.9%)であり、両薬物がわが国の主要な乱用薬物であることを示している。特に有機溶剤乱用は警察庁の検挙状況の報告以上に浸透していることがわかる。

大麻乱用者を23名(1.1%)の人が知っていたと回答していた。警察庁、厚生省は大麻取締法違反による検挙者が近年増加していると報告しているが、潜在的な乱用者は予想以上に多いことを示している。先述の海外旅行ないし滞在中にその引金になっていることが十分考えられる。

コカイン乱用者は6名(0.3%)の人が知っていると回答した。近年わが国でのコカイン乱用の流行が心配されていたが、コカインがわが国の社会に浸透している結果であるといえよう。

ヘロイン乱用者は1名(0.04%)の人が知っていると回答があった。わが国でのヘロインを含め麻薬乱用は少ないと云われているが、その事実を示唆する結果であろう。

薬物不明と回答した人は20名(0.9%)であった。

東京圏、大阪圏の15歳以上の人口36,568,092人から、薬物乱用者を換算すると東京圏、大阪圏の人が知っている乱用者は、有機溶剤約263万人、覚せい剤約69万人、大麻約40万人、コカイン約11万人の乱用者がいると推測する。回答者の報告の信憑性の問題はあるが、それ差し引いても潜在的(過去を含めて)な乱用者の存在の多いことを示唆している。

7. 対象者自らが過去に薬物乱用を誘われた経験の有無について

過去に有機溶剤の使用を誘われた経験をもつ人は45名(2.1%)と最も多く、次いで大麻23名(1.1%)、覚せい剤14名(0.7%)、ヘロイン4名(0.2%)、コカイン2名(0.1%)

順であった。

大麻が有機溶剤に次いで2番目に多かったことは意外であったが、大麻が社会に予想以上に浸透していることと、大麻が回答者にとりダーティなイメージがより少ないために答え易かったことが理由に考えられる。

ヘロインに誘われた人が4名いたことは、一部の人の間ではヘロインが乱用されていることを示唆する結果であり、コカインとともに今後も嚴重に注意していかねばならない。

誘った人は70～90%が「学校の友人・知人」、「その他の友人・知人」であり、「密売人」「見知らぬ人(乱用者)」より多く、生活の周囲には友人・知人である多数の薬物乱用者が存在していることを示唆しており、これらの友人・知人の存在が薬物乱用の初回使用のおもな動機であることがよくわかる^{3,5}。

試みに東京圏、大阪圏の人口より薬物乱用に誘われた人は、有機溶剤76万人、大麻40万人、覚せい剤25万人、ヘロイン7万人、コカイン3万人いると推測する。その人たちの周囲には同数のあるいはそれ以上の乱用者がいることが推察される。

8. 対象者自らが過去、現在に違法薬物使用の経験の有無について

「過去、最近1年間に不法薬物の使用経験の有無」の質問では、過去に経験したことがあると回答した人は、有機溶剤33名(1.6%)、覚せい剤8名(0.4%)、大麻8名(0.4%)コカイン1名(0.04%)、ヘロイン0名であった。いずれも「最近1年間の使用者」はなかったが、前年度の市川市の調査でも同様であった。薬物の違法性ゆえに回答者が答えにくく、また防衛的姿勢をとった結果であったかと考える。

有機溶剤使用の経験者に未成年者は含まれない。和田らの最近の中学校の実態調査⁶によると「シンナー遊び」の経験者は1.5～2.0%と報告しているが、未成年者にはこの種の質問に回答しにくかったことが推察できる。対象の選択、質問内容、調査方法など今後の研究課題であり、調査対象、調査地域をさらに大きくして継続的に調査していくことが必要と考える。

大麻の潜在的な経験者は、予想より大幅に

多いことが考えられる。また、コカインの社会への浸透が警告されていたが、将来大麻とともに拡大浸透していく可能性が高いと考え、今後の動向に警戒していかねばならぬ。

ヘロインの経験者はいなかったが、先述の通り楽観を許さない状況にあると考える。

東京圏、大阪圏の人口より調査圏の違法薬物の過去の使用経験者を換算すると、有機溶剤58万人、覚せい剤14万人、大麻14万人、コカイン1万人が推測される。

9. 薬物乱用・依存の世帯調査について

欧米では薬物乱用・依存に関する住民調査は国家規模の事業として積極的に行われており、その調査結果は薬物乱用の実態の把握に有効であり、教育、啓発、予防、治療対策を考える上で貴重な資料として利用されている。

特に、薬物乱用が大きな社会問題になっている米国では国立薬物乱用研究所 National Institute of Drug Abuse(NIDA)により1972年から11歳以上の一般住民を対象とした薬物乱用・依存に関する世帯調査(National Household Survey)が施行されており、当初は3,000人から始まり、現在は32,000人、予算は13,000万ドルで国家規模の調査が毎年行われている。米国の薬物乱用・依存対策を考える上の基礎資料となっている。

わが国でも本格的な世帯調査の実施が長年望まれてきたが、平成4年度厚生科学研究費補助金麻薬等対策総合研究事業の一つとして「薬物乱用・依存の世帯調査」が実施され、平成5年度は東京圏、大阪圏の調査が実施された。

これらの調査により、睡眠薬、抗不安薬など依存性薬物が医療の中で非常に多くの人を使用している実態、海外で大麻など違法薬物を使用する機会が多いこと、市民の友人・知人に非常に多くの違法薬物乱用者が存在しており、使用を誘われる機会が多いこと、大麻、コカインなどが社会に浸透しつつあること、過去に違法薬物乱用の経験者の実態などがある程度解明されたと考える。

現在の違法薬物の乱用者の実態に関しては残念ながら明らかにならなかった。質問内容、調査方法などを検討する必要がある、今後の研究課題である。

E. 結論

東京圏（旧都庁を中心に50km）、大阪圏（大阪駅を中心に40km）の住民を層化2段無作為抽出法で抽出した満15歳以上の男女3,000人を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存の世帯調査」を実施した。調査期間は平成5年11月4日から12月3日であった。

1. 有効回答数（率）は2,125（70.8%）であった。

2. 喫煙率は31.0%（男性51.1%、女性14.0%）であった。未成年者の喫煙の開始時期は男女とも42.9%が中学時代であった。

飲酒率は71.9%（男性83.9%、女性61.7%）であった。

喫煙率と飲酒率は正の相関があった。

3. 日常生活で何等かの常用薬を使用している人は33.1%であり、50歳以上ではより高率であった。依存性を有する治療薬を「週に数回以上」使用している常用者は鎮痛薬2.6%、精神安定薬1.9%、睡眠薬1.1%であり、女性に多く、50歳以上の男女に高率であった。いずれも治療の目的で使用していた。

精神安定薬で0.1%、睡眠薬で0.04%の人が乱用・依存例が疑われたが調査からは同定出来なかった。

4. 海外旅行、滞在中に薬物の使用を誘われる人は、旅行・滞在者の3.5%であり、その機会が多い。

5. 生活の周囲で薬物乱用者を知っていると回答した人は、有機溶剤7.2%、覚せい剤1.9%、大麻1.1%、コカイン0.3%であった。

6. これまでに薬物乱用に誘われた経験をもつ人は、有機溶剤2.1%、大麻1.1%、覚せい剤0.7%、ヘロイン0.2%、コカイン0.1%であった。

7. 過去に薬物乱用を経験した人は、シンナー等有機溶剤1.6%、覚せい剤0.4%、大麻0.4%、コカイン0.04%であった。最近1年間の経験者の回答は得られなかった。

F. 参考文献

1. Bejert N: Social Medical classification of addiction. Int J Addict 4:3. 1969.
2. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物依存の世帯調査、平成4年度厚生科学研究費補助金-薬

物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成4年度研究報告書、p1-23、1993.

3. 福井進、和田清、伊豫雅臣：薬物乱用・依存の実態と動向に関する研究（その2）-医療施設の実態調査より-、厚生省精神・神経疾患研究委託費薬物依存の発生機序と臨床及び治療に関する研究-平成3年度研究報告書p143-158、1993.

4. 福井進：わが国の薬物依存の現状、薬物依存（佐藤光源、福井進編集）pp49-59、世界保健通信社、大阪、1993.

5. 和田清、福井進：薬物依存の発生因をめぐって。精神医学33:633-642, 1991.

6. 和田清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究、平成4年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成4年度研究報告書、p25-63、1993.

質問内容

- 問 1. ア) 健康状態はいかがですか。
- 問 1. イ) 日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか。
- 問 1. ウ) 毎日している仕事でうまくいかないことがありますか。
- 問 1. エ) 日常の生活で不安を感じた、緊張したことがありますか。
- 問 1. オ) 頭痛や頭が重い感じで悩まされることがありますか。
- 問 1. カ) 寝つけなかったり、朝早く目ざめて眠れないことがありますか。
- 問 1. キ) 現在の生活に満足していますか。
- 問 2. 現在たばこをお吸いになりますか。
- 問 2-1. 禁煙をしようとしたことがありますか。
- 問 2-2. 起床して何分後にたばこを吸いますか。
- 問 2-3. 禁煙場所で喫煙することがありますか。
- 問 2-4. もっとも充足感を与えてくれる喫煙
- 問 2-5. 午前と午後どちらが多きたばこを吸いますか。
- 問 2-6. 病気で寝ている時でもたばこを吸いますか。
- 問 2-7. ふだんたばこをどの程度吸いこみますか。
- 問 2-8. 初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか。
- 問 3. アルコールはお飲みになりますか。
- 問 4. 初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか。
- 問 5. 家庭に用意してある薬 (M. A.)
- 問 6. 常用している薬 (M. A.)
- 問 7. 最近1年間に、しばしば頭が痛くなったことがありますか。
- 問 7-1. どのように対処しましたか。(M. A.)
- 問 8. 最近1年間に鎮痛薬を使用したことがありますか。
- 問 8-1. 鎮痛剤はどこから入手しましたか。
- 問 8-2. 服用後の経験感覚 (M. A.)
- 問 9. 最近1年間に精神安定薬を使用したことがありますか。
- 問 9-1. 精神安定薬はどこから入手しましたか。
- 問 9-2. 使用理由 (M. A.)
- 問 9-3. 服用後の経験感覚 (M. A.)
- 問 10. 精神安定薬についてどうお考えですか。(M. A.)
- 問 11. 最近1年間に睡眠薬を使用したことがありますか。
- 問 11-1. 睡眠薬はどこから入手しましたか。
- 問 11-2. 使用理由 (M. A.)
- 問 11-3. 服用後の経験感覚 (M. A.)
- 問 12. 睡眠薬についてどうお考えですか。(M. A.)
- 問 13. 薬物乱用という言葉を知っていますか。
- 問 14. 知っている乱用薬物の名前
- 問 15. 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか。
- 問 16. 日本における薬物乱用の問題状況
- 問 17. 「あへん戦争」について知っていますか。

- 問18. 米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか。
- 問19. 覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題だと思いますか。
- 問20. 「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる事がある」と思いますか。
- 問21. 薬物によってはさほど危険ではない薬物もあると思いますか。
- 問22. 「シンナー遊び」の一部未成年者間での流行周知度
- 問23. 覚せい剤が長年にわたり乱用されていることの周知度
- 問24. 家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか。
- 問25. 海外旅行、出張、留学をしたことがありますか。(M. A.)
- 問25-1. 海外滞在中に、薬物を使用した人を見聞きしましたか。
- 問25-2. 海外滞在中に、薬物使用を誘われたことがありますか。
- 問25-3. 海外滞在中に、使用された薬物(M. A.)
- 問26. 周囲で、薬物を乱用している人を知っていますか。
- 問26-1. その人が使用している薬物は何ですか。(M. A.)
- 問27. シンナー等有機溶剤の使用を誘われたことがありますか。
- 問27-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問28. 覚せい剤の使用を誘われたことがありますか。
- 問28-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問29. 大麻の使用を誘われたことがありますか。
- 問29-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問30. コカインの使用を誘われたことがありますか。
- 問30-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問31. ヘロイン等麻薬の使用を誘われたことがありますか。
- 問31-1. 誘った人は誰ですか。(M. A.)
- 問32. 「シンナー遊び」を経験したことがありますか。
- 問33. 「覚せい剤」を使用したことがありますか。
- 問34. 「大麻」を使用したことがありますか。
- 問35. 「コカイン」を使用したことがありますか。
- 問36. 「ヘロイン」を使用したことがありますか。
- 問37. 性別
- 問38. 年齢
- 問39. 最終学歴
- 問40. 未・既婚
- 問41. 就業形態
- 問41-1. 仕事内容